

『わたしのお医者さま』
— DOCTOR AT SEA —

(1955年公開) ※DVDレンタル・販売あり

若き頃のブリジット・バルドーと
ダーク・ボガードの船上ラブストーリー

読者の皆さんの中には、「船医」にお世話になった方もいるだろう。幸いにして私本人は経験ないが、初めてのクルーズで一一緒に乗船した友人が体調を崩し、医務室に行ったことがある。この経験がきっかけで、船に乗るとすぐに医務室の場所を確認するようになった。

結婚から逃げ、男だらけの
ロータス号で南米へ

今回の映画は「船医」が主役だ。医師になって1年、ロンドンで見習いドクターとして働くサイモンは、院長の娘と結婚させられるのが嫌で診療所を辞め、男ばかりの貨物船ロータス号の船医として赴任する。船長は頑固で癪癪持ち、変わり者ばかりの船員たちには新米と見くびら

れ、からかわれながらも虫歯から神経病まで一手に引き受けていく。南米ベロスで船員たちと訪れたバーで一目惚れした美人歌手ヘレンと、女人禁制の船内でなぜか再会。実は彼女は船オーナーの姪で、社長の30代の娘とともにロンドンへ帰るのだという。慣れない女性同行の旅に浮き足立つ船員たち。そんな時に急病人が現れ……。

主人公の若き船医を演じるのは「ベニスに死す」『愛の嵐』のダーク・ボカード、当時30代前半だ。のちにヴィスコンティ作品の渋い性格俳優のイメージが強い彼だが、この頃はアイドル的人気若手俳優の一人で、そのイメージにピッタリの初々しい二枚目医師を爽やかに演じている。美人歌手ヘレンはブリジット・バルドー、通称B.B、当時20歳。地毛

のブラウンヘアのまま可愛らしいロンドン娘を演じている。のちに「フランスのマリン・モンロー」と呼ばれるセクシーなイメージを世の中に広めた映画「素直な悪女」は、翌年1956年の公開だ。B.Bは2011年に日本の自動車会社のCMで彼女の歌が採用されるなど歌手としても知られているが、作中で二人が出会うシーンで歌う「Je Ne Sais Pas」(ジュヌセパ。私は知らない)は実は吹替えで、イギリスのポップス歌手ジル・デイが歌っている。ちょっと舌つたらずの感じが「フランス人のB.Bが不慣れた英語で歌っている」ように見え、役の可憐さが引き立っている。ちなみに同タイトル曲が何曲もあり、その中に世界的有名な歌手セリーヌ・ディオンの曲もある。歌詞も雰囲気も全く違うが、出だしのメロディは同じだ。聞き比べてみると面白いだろう。

映画の話に戻って、この作品はイギリスにおける1955年公開映画でベスト3の興行収入を上げた。リ



船員たちからの鳥の贈り物に喜ぶサイモン医師とヘレン

(イラスト：吉崎 英二郎)

チャード・ゴートンの小説を原作に「○○のドクター」シリーズとして7本のコメディ映画が製作され、そのうちボガード演じるサイモン医師が主役なのは4本、B.Bが出演したのは日本で劇場公開されたこの一本のみ。製作から4年後の1959年だった。日本公開はたぶんB.Bの人気のおかげ。日本でDVD販売も現在この一本のみ。こうしてこのコ

ラムで紹介できたのもB.B人気のおかげと言えらるだろう。

船内の医療室では
盲腸炎の手術も

乗船客としては、世話になりたくない船医だが、客船に医務室があることは、もしもの時いつでも医師に診てもらえるという大きな安心につながる。通常のクルーズ客船は、医

師の他に看護師も常駐している。診療時間が設定されているが、いざとなれば24時間体制。船内での治療の原則は応急処置。しかし、盲腸炎など簡単な手術はできる手術室や入院ができる施設が整っている船もある。「わたしのお医者さま」でも作中で手術を行っている。以前このコラムで紹介した刑事コロンボ主演のテレビ映画シリーズ「歌声の消えた海」で犯人がアリバイ作りで休んでいた部屋は、いざという時は入院対応スペースになるのだろう。

SAR条約などによって沿岸国の海軍(日本は海上保安庁)がヘリコプターで医師や薬品の補給をしてくれることになっているので、船内で風邪が流行っても薬の在庫切れの心配は無用だ。重篤の患者は、次の寄港地で陸上の病院に搬送したり、緊急時には、臨時寄港やヘリコプターで患者を移送したり、最善の医療を受けられるように手配する。さまざまな港や国をめぐるクルーズでは、どの港でどのように要請をすれば、最善の医療体制で受入れてもらえるか、それを考え、最短で手配するのが船医の重要な仕事になる。

日本船は医療費がかからない場合

もあるらしいが、基本的には自由診療で、診察や薬代、港や医療施設への搬送代は請求され、超高額になることも当然ある。健康保険・社会保険は使えない。その理由は船内の医務室は「特定の人(乗船客)のみが利用できる医療機関であり、一般の人が自由に診療を受けられない(開放性がない)」という理由で、当局(東京都)の行政指導によるものだ。旅行保険に入っていれば、医療費と関連費はもちろんカバーされるから安心を。

また、外国船に乗船する時には、飲んでる薬の成分を英語名で書いたものを持っていくのが望ましい。他の薬を処方してもらおう際、副作用の予防にもなる。慢性疾患がある場合、英語の診断書も必要だ。

クルーたちの
カウンセリングも

日本船も外国船でも、船医にとつて一番大変なのは、クルーの精神的な部分を診ることだ。長い期間、プライベートもなく、長時間ハードな仕事を行うクルーの健康管理も船医の仕事。カウンセリング的な

ことも船医の大事な仕事なのだ。

元船医のエッセイや
マンガにも注目

船医の暮らしをもっと知りたいなら、北杜夫「どくとるマンボウ航海記」(水産庁の漁業調査船「照洋丸」に乗船)、永井明「あやしい船医、南太平洋をゆく」(水産大学の練習船「耕洋丸」に乗船)、西丸與「ドクター西丸航海記(ドクター・トド船に乗る)」「(ばしふいっくびいなす」(乗船)、田村京子「北洋船団女ドクター航海記」(北洋船団に女船医として初乗船)などのエッセイがある。

また、クルーズ客船の船医を主人公にしたマンガもある。「クルーズ—医師山田公平航海誌」は矢島正雄原作、菊田洋之作画で、小学館発行「ビックコミック」で2008年〜2009年に連載された。日本を周遊する豪華客船「フェニックス」号の船医と、乗船してくる多くのお客さんとの出会いを描いているヒューマンドラマ。ぜひ実写で映画化してほしい作品だ。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

